

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
な か ま 編 集 係

〒285-0025
佐倉市 錦木町 198-3
電話 (043) 485-1801

2 ページ 徳川の埋蔵金について ----- 今井信幸 あやとり ----- 徳武 寛
3 ページ なくそう子どもの虐待 ----- 廣吉正毅 ディサービス「ちとせ」で 加瀬清子

元禄地震

金井 義彰

今年二月二十七日午後（現
地時間は同日午前）発生した
南米チリの巨大地震は、マグ
ニチュード八・八という想像
を絶する凄まじさ。地震によ
つて発生した津波の日本到来
をめぐってテレビ各社が長時
間にわたって報道を続けてい
ました。

日の大晦日）午前二時ごろ、
震源は相模トラフ、マグニチ
ュードは八・二。房総半島各
地の震度は中南部で震度六、
御宿付近で震度七になったと
推定されています。資料の震
度分布図によると、佐倉付近
は震度五になっています。

幸い当初の予測に反して波
高は低く、翌々日の三月一日
には津波警報、津波注意報と
も全面的に解除されました
が、この津波で思い起こすの
が、いまから三百年ほどまえに
房総半島を襲い多くの人命を
奪った元禄地震です。元禄地
震についていくつかの資料で
記述内容が若干異なります
が、私なりに概要をまとめ
ると次のとおりです。

地震発生は元禄十六年（一
七〇三）十一月二十三日（現
在の暦にすると十二月三十一

地震による地殻の隆起量は
最大で四メートル以上、南部はほ
ぼ隆起域になっていますが、野
島崎は地震のまえは野島とい
う小さな島でしたが、地震で
う小さな島でしたが、地震で
陸続きになり岬になりました。

現在、JR館山駅から海
岸までかなりの距離がありま
すが、駅があるところは地震
まえは海底で地震で海底が隆
起、陸化しました。また、勝
浦に平目ヶ台という地名があ
るそうですが、津波で打ち上
げられた鮮（ひま）を拾うことができ
たのが地名の由来だそうで
す。

さて津波ですが、午前二時
から四時にかけて三回ほど安
房、上総の沿岸に波高四〜八
メートルの津波が襲来、御宿で八
メートルと最も高く、房総南部、九十
九里一帯で五〜六メートル、津波で
実に五千余名の人たちが亡く
なっています。

海岸から遠く離れた佐倉は
勿論、津波の被害はありません
が、渡辺善右衛門が著した
『古今佐倉真佐子』のなかに
この地震に関する貴重な記述
があります。善右衛門は十二
代佐倉藩主の稲葉正知に仕え
た武士ですが、元禄十四年に
江戸で生まれ翌年に佐倉に移
り、一回目の佐倉時代を過ご
しています。

元禄地震のときは数えて三
歳でしたが、後日、人から聞
いた話として地震当日、夜が
明けるまで七十五回の揺れが
あったこと、余震が旧暦でそ
の年の年末まで続いたこと、
さらに佐倉城のあかず門の心
木が振じれてしまったことな
どを書き残しています。

（編集委員）

徳川の埋蔵金について

近頃「霞が関」の埋蔵金が折にふれて言われている。

ほんとうに有るのであれば、国民の為に有効に使ってもらいたいものである。

さて、我が国には古来、埋蔵金の伝説はいろいろあるが、その中で最大の埋蔵量と言われるのが、徳川の埋蔵金である。我が家には、畠山清行さんという作家が、永年にわたって調査した結果の集大成である『日本の埋蔵金』全二巻があるが、その本によつて諸賢の後学の為に紹介をしたいと思う。

時は幕末、慶応三、四年の頃江戸から利根川を遡行する船団が渋川にて上陸し、幾多の油樽を赤城山の北麓めぐけて運びこんだと言われている。厳重な警備の下で暗夜に行われ、村人達が近づく事を許さず、道無き道を進んで行ったようである。

今つて具体的な埋蔵場所

が特定できないのは、埋蔵に関与した人々が斬殺又は毒殺されてしまった事、後世に残った絵図と思われるものが、八門遁甲はちもんとうこうという秘物理蔵法によつて印されており、解読できずにいるためのものである。

有力な説としては、現在の赤城村（当時の敷島村）であるが、榛名山説や赤城山南麓の不動の大滝にある「国定忠治の岩窟」説もあり、最近でもロマンを求めて掘り続けている人が絶えないようである。ではその埋蔵量はどの位かというと、江戸城の金蔵から三六〇万両、加えて全国有名社寺の黄金製品、甲府の御金蔵の金貨の大部分だと言われている。

現在の貨幣価値にしたら、どの位等と野暮な事は言うまい。カレッジを卒業して暇ができたら行ってみたいと思う。

（井野 今井信幸）

あやとり

縁側に陽のあたる午後のひととき、母が娘に着古したセーターの解ほどきの手伝いをさせている。娘は母が解き自分の手のひらにからませる毛糸を、三歳のつぶらな眸で追い掛ける。規則的に、寄り目になつたり、もどつたり。二十分程たつた頃、娘はもう限界であるらしく、それを感じた母は「ちよつとお休みしましょ」と娘に呼びかける。「お休みお休み」。娘に笑顔が戻る。

紐に結んで輪にした毛糸を娘の両手に掛け形を整えながら形を作る。母は受け、娘に指示し、別の形に変えながら、娘の指に移す。そのくり返しのたびに、川になつたり、鼓つづみになつたり、琴になつたり。娘はキヤツキヤツと喜んでいる。母は、笑い過ぎ、はしゃぎ過ぎ、けとばしそくなる娘の足許から毛糸の束を遠ざける。

この、今出来たばかりの毛糸の束を見ながら、先日佐倉市内の国立歴史民族博物館を思い出す。あれは、絹糸だつたが、束ねた形は、目の前にある毛糸の束と同じだ。そして、数え方を思つた。とりあえず、一把わ、二把と数えておいたが何か、ちがう気がしていた。

今日、漢字の参考書をめくつていたら、国字の一覧表があり、その中に、「総」という字があり、かせ、と振り仮名があり、紡つむいだ糸を一定の枠の長さに巻きとつて外し、束にしたもの。またそれを数える言葉、との説明があつた。さらに漢和字典で、「かせ」を引くと椽、枷、桁、校、械、総と六つもある。漢字の豊かさを改めて思い知る。

暫しの遊びの後、母と娘は、またも毛糸の解しを始めた。庭の梅に一輪だけ花が咲いている。

（上志津 徳武 寛）

なくそつ子どもの虐待

情報の開示と共有化

命にかかわるケガや育児放棄など、子どもの虐待が跡を絶たない。多くは三歳未満から小学生までの年齢だそうだが、虐待のほとんどは家庭という閉ざされた場所で行われる。何かの拍子で近隣や知人が知る。その地域で噂になる。近隣では解決策が見当たらない。放つては置けないし役所や警察へ知らせる。子育てで困り果て途方に暮れた親が、自ら援助をもとめることもある。虐待につながると思われる要因には経済的問題、保護者の心身の状態やひとり親家庭などがある。誰かに相談したいが、行政の相談窓口や他人に話したくないこともある。

る。法医学の現場、地域医療、福祉の役所の三者が互いに協力して当たれば良い。法医学は解剖で死因が明らかになった情報を持っている。地域医療の医師は頭や顔の外傷、口中の傷を診て正常か異常かが判る。児童福祉の役所はこれまでに得た情報を持っている。ただ、警察には「捜査の秘密」と言う壁がある。情報開示は無理だと思う。これらの情報を福祉に関係する役所でネット化する。地域で共有し必要な人が必要なきに利用する。虐待防止の手がかりになると思う。情報の提供者や関係者には迷惑のかかることの無いよう、匿名・守秘義務に配慮する。若い親が子育てなどで困ったとき、すぐ活用できる市民ネットワークの構築が必要だと思った。

(南臼井台 廣吉正毅)

デイサービス

「ちとせ」で

デイサービス「ちとせ」に通い始めて、早くも七ヶ月の月日が経ちました。

テレビを見るか、本を読むかの毎日でしたけれど、今は週に四日通う「ちとせ」が私の生活になりました。

その「ちとせ」の九月二十一日のこと、オレンジ色の包装紙のプレゼントを頂きました。

プレゼントには、藤紫色の台紙に貼られたメッセージが添えられていました。

敬老の日おめでとうございます。

いつまでも元気で、明るく楽しい日々をお過ごし下さい。

デイサービスセンター

ちとせ職員一同

と記され、とりどりの花を盛った筆の絵が描き添えられていました。

胸をときめかせて、その場

でプレゼントを開いてしまいました。

中は！ 何と桜の花の模様をあしらったピンク色の可愛いタオルのハンカチでした。宇野千代のデザインを連想しながら、職員の皆様が心をこめて選ばれたであろうことに、すっかり嬉しくなっていました。

ピンクの色は、このまま孫へのプレゼントに使えます。

孫のある年代へのお心遣いが垣間見られるプレゼントでした。孫の無い私でも、近くに住む姪の子へ贈ろうか、墓参の折の生家への土産に加えようかと、思いは広がりました。

先日のことでした。ゲームのため円陣に座った中のお一人が、そのハンカチを使われていたのです。少しの違和感も無く…。

近頃の私は、老齢だからと躊躇することが多くなっています。反省すること頻りでした。

(臼井 加瀬清子)

5月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043 - 485 - 1801

〒285 - 0025 佐倉市錦木町198 - 3

さくら道

高齢者と言われる年齢に入り、年をとることについて考えてみた。

若い時に、もっと考えて行動していれば、また自分の世界を大切に生きがいを見つけておけば、などという悔やんでみても、逆に仕事一筋でやってきた自分の人生がむなしく思えた。

それなら、いっそ前向きに考え行動しようと思った。

今では年をとっただけの知恵もつき、若い時とは違った

見方ができるようになった。これからは、この知恵を生かし年をとったからこそ考えられること、できることが沢山

あると思ひ、ボランティア活動等で多くの人と交わり、仲間づくりができたならなど考えれば、あながち年をとって行くのも悪くはないと思う今日この頃である。

（六角 学）

あとがき

「喜望峰から東で、悪臭のないうちに初めて出合った」。

江戸末期に來日した初代駐日英国公使オールコックの言葉である。当時の江戸は、上下水道が完備し、ゴミや糞尿の処理もシステム化されていた。アジアの果てにこのような文化を持つ国があったとオールコックは驚いている。

また明治初期に東北地方を歴

訪した英国人女性は、「この国には貧乏な人はいるが、不衛生な人はいない」と記している。

今月号は、その江戸時代の研究が二編「元禄地震」と「徳川埋蔵金について」。さらに、伝統の遊び「あやとり」の話と、逆に日本の良い伝統がこわれかけていると警鐘をならす「なくそう子ども虐待」、最後に古き良き人間関係を想い起こさせる「ちとせで」。組み合わせの妙をお楽しみ下さい。

（岡本文隆）